

小松左京

TOKUMA NOVELS 近未来サスペンス巨篇

首都消失
下



日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会



TOKUMA NOVELS

小松左京

首都消失 下

発行者 荒井 修

発行所 徳間書店

東京都港区新橋四ノ一〇 郵便番号一〇五

電話四三三・六二三一 振替東京四一四四三九二

Sakyô Komatsu ©1985

落し・乱しはおとりかえいたします

Printed in Japan

〈編集担当 菅原善雄〉

85F1dc

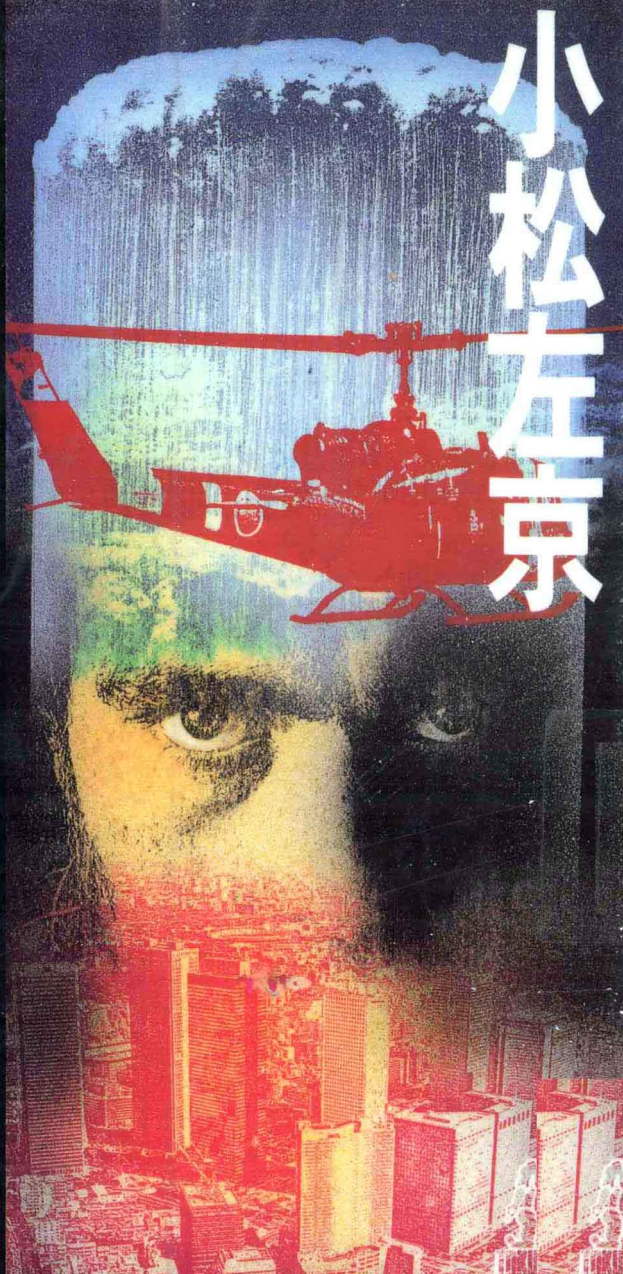
ISBN4-19-153057-7

小松左京

首都消失

TOKUMA NOVELS 近未来サスペンス巨篇

下



しゅとしょうしつ
首都消失下・小松左京
こまつさきやう

かつて「SF界のブルドーザー」の異名をとった小松左京の精力的な活動は、五十の半ばを迎えた現在もいっこうに衰えを知らない。科学万博では三つのパビリオンのアドバイザーをつとめ、五月からは約三カ月、ある民放TV開局記念特番のため、黄河を五千キロ遡って中国古代文明の源流を探る予定だ。



TOKUMA NOVELS



近未来サスペンス巨篇

首都消失 下

小松左京



徳間書店

TOKUMA NOVELS

此为试读, 需要完整PDF请访问: www.erton.com

首都消失 目次

第八章 臨時政府 | 7

第九章 “雲”と嵐 | 83

第十章 黒い冬 | 156

第十一章 惨禍と再建 | 238

第八章 臨時政府

1

「出てきたぞ！」

という鋭い声が、ホテルのロビイにひびきわたった。

広大なロビイのあちこちにたむろしていた記者たちやカメラマンたち、テレビ、ラジオ局の取材班は、いつせいに腰をうかし、何人かは奥の通路へむかつて突進した。——気の早い、テレビニュースのチームは、もうカメラを通路の方へむけ、照明係は、腰のバッテリーのスイッチを入れて、アイランプをたかだかとかかげ、明りを通路へふりむけた。

通路の方から、六、七人の人の塊りが、ロビイの方に動いてきた。——動くにつれて、その人だかりに、さらに記者たちがわらわらと集り、塊りはふくれ上りそうに見えたが、そのまま何人かは、すぐはなれて、のろのろともときた方へひきかえた。

「ちがうちがう……」と、誰かが手をふって叫んだ。
「会議はまだつづいているそうさ。——事務局員が、連絡に出てきただけだ……」

「だいぶ長びいているな……」人だかりの方へ行きかけた中年の新聞記者が、腕時計を見ながらつぶやいた。「休憩もなしに、ぶつつづけだ……」

「会議の様子はどうか？」と、人だかりの方から帰ってくる記者に、もう一人の記者がきいた。「何かもめているのか？」

「いいや……事務局の若い下っ端で、何も教えてくれん」と、たずねられた記者は、首をふった。「だけど、三時の休憩の予定が、もう一時間ちかくものびてるんだから、もうちょつとしたら、事務局長か誰かが出てくるだろう……」

「ああ、田宮局長!……」と、もうだいぶよれよれになった三つ揃いの服を着て、不精鬚ののびた若い記者が、フロントの方からぶらぶらやってくる長身の男にむかつて叫んだ。「どこに、おらっしゃったのですか?——ずいぶんと探しましたばい……」

「どこにて——ここにずっとおったがな……」田宮は、蓬髪をかきあげながらとぼけた顔をして、他社の記者連中の方をふりかえった。「どうやら、記者発表は、夜になりそうやぜ。——今、会議場から出てきた若い事務局員のあとをつけていたら、宴会係に、夕食の変更を申しこんどった。——ダイニング・ルームの会食はキャンセルで、会場に弁当をはこばせるらしい。時間は六時すぎやと……」

「やれやれ……」と新聞記者の一人は、がつくり肩をおとして、傍らの椅子に腰をおろしながらつぶやいた。「会議しながら食事か——それじゃ、こつちも、ぼつぼつ腹ごしらえしといった方がいいかな……」

「あの……プレス・リリースは、何時ごろになりそ

うですか?」長身で赤毛の、灰色の眼をした、まだ三十前後の外人記者が田宮の話をききつけて上手な日本語でたずねた。「夜おそくなりますか?」

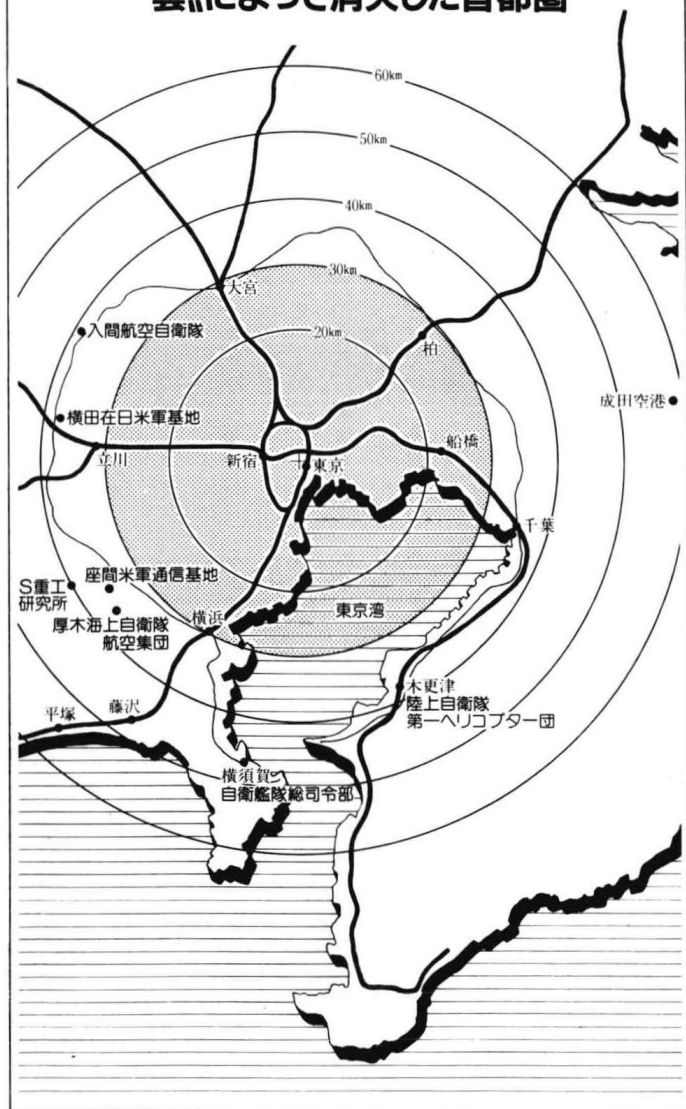
「それはまだ、わかりません……」田宮は、煙草をくわえながらいった。「そやけど、六時以前という事はないでしょう……」

「わかりました——どうもありがとう……」と、その長身の外人は、にこっと笑って手をあげた。「ああ、私、マッコーマー……クリストファ・マッコーマー……クリスとよんでください。どうぞよろしく……」

それだけいうと、マッコーマーという記者は、大股でエレベーター・ホールの方に歩み去っていった。「あいつは、どこの特派員だ?」と立ち去って行く外人記者の背を見ながら、椅子に腰をおろした記者の一人がきいた。「APか?——それともニューヨーク・タイムズか何かか?」

「“ニューズ・ウィーク”の契約記者や……」田宮は、煙草をまずそうに吸いながらいった。「親父が、

"雲"によって消失した首都圏



「スターズ・アンド・ストライプス」の記者で、小学校四年ぐらいから、ハイスクール中途まで日本におったらしい……」

「田宮さん、前から彼を知ってるの？」と、色の浅黒い、でっぷり肥った記者がきいた。「えらいくわしいじゃないの……」

「いや——昼飯の時、ポータブル・タイプの替えりボンはどこで売ってるか、とたずねられたんで、ここには、各種ワープロがあつて、ファックスと連動させている奴もあるで、と教えたつたら、眼をまるくしよつてな。それからちよつと話をしたんや……」田宮はにやりと笑つた。「ついでに、あいつの書きかけとつた記事を、ちよいと眼を通したつてな……。名古屋の事、何も知らんらしくて、ええかげんな紹介しとつたから、ちよつと教えてやつたら、今度は、デトロイトとグロトンを一緒にしたような大産業都市で、日本の次の首都候補の一つ、なんて書きよつてくさ……」

「それで、そっちの方は、そのまま修正せずに送ら

せたの？」

テーブルをかこんだ記者たちの間から、軽い笑い声が上がつた。

「いやあ、それにしても、さすが先輩の取材力はすごいなあ……」と四十前後の、ひどくハンサムでスマートな記者が嘆声をあげた。「ちよつとそこらへんぶらぶらしてるだけで、いろんなネタをとつちまうんだからねえ……」

「そら、あんたらの時代と、きたえられ方がちがうばい。——わしらの先輩には、同盟で、世界中の危ない所わたり歩いとつた人とか、昭和初期の有名犯罪のスクープ合戦を、ゲートル巻きで闘いぬいたとか、おつかない記者がようけおつてな。ばつて、わしは今でも、ポケットの中にかくしたザラ紙にメモをとる、なんて芸当ができるんぜ。なんせ、あんたらの時代みたいにな、マイクロ・カセットコーダーなんて、影も形もなかった時代やもんね……」

「それにしちゃ、ここのワープロだのファクシミリだの、ニューメディア関連の設備の事よく知つてま

すな……」と肥った記者がいった。「われわれ、地もとに近いのに、こんなものが名古屋にできかっている、という事をちつとも知らなかったのに……」

「わしも、はじめから知ってたわけやない。——大阪で、緊急近畿知事会議を取材しとつた時、ちよこつとここの事を小耳にはさんでな……」田宮は吸いおわたた煙草をもみ消しながらいった。「来年の正月オープンの手定やというので、どんなホテルかいな、と地もとにしらべさせたら——これはどうも、全国知事会議の会場はここにきまりそうやという感じがしたんで……」

「暮れの十五日から、仮オープンという事を知ったからですか？」

と、ハンサムな記者がきいた。

「いや——それだけやないけどな。ちよつとこのホテルの成立した背景をしらべてみたら……」

「局次長……」と田宮の部下の、早坂という若い記者が袖をひっぱった。「あの、倉橋先生ですが……」

「じゃ、またあとで……」田宮は、たむろしている記者たちに手をあげて、彼らの傍をはなれた。「倉橋さん、どうした？——こちらへついたか？」

「ええ、さつきキャッスル・ホテルにチェック・インされて、すぐこちらへ……」

「ほう！——ここへ来とんしゃるか？ そらまた、気の早いこつ……。新幹線か？」

「いえ——名神を車で……。A紙の冬木さんが一緒に、むこうが車を出してくれました」

「ほう、徹ちゃんが……。お守りについてくれたか……。で、今も一緒か？」

「はい——十階の特別室で……。何でも、植木さんとかいう、昔の知り合いの方と、そこで約束があったとかで、いま何か話しておられます。むこうもえらいおじいちゃん……。――」

「植木？……」田宮はぎよつとしたようにたちどまった。「ひよつとしたら……色の黒い、顔の四角い、頑固そうな……頭が真白で、眉毛も真白な……」

「はい、田宮さん、知つとられるとですか？——何でも、富山から出てこられたとです。車の中で、倉橋先生が、電話で話しとられました……」

「知るも知らんも、もう隠退してからだいぶなるが、もと政界の大もンじゃ……。昭和三十年代から四十年代へかけて、政府与党の……」といいかけて、田宮はあきらめたように頭をふった。「まあ、お前らに、そんな話ししても、しよんなかない……。とにかくその特別室へ、案内せい」

二人は、トランシーバーをもった私服警官があちこちにたっている、フロントの前を通りぬけ、梨地に光琳風の流水紋を筋彫りにした、ブロンズ色のエレベーター・ドアの前に立った。——むかいあわせに八基のエレベーターがあるが、動いているのは、いま二基だけだ。

「ここは、何やすごかホテルですね……」

早坂は、フロントからロビー、正面ドアの方をふりむいてつぶやいた。——仮オープン前なので、通路のカーペットの中央には、まだ長々とカンバスが

ひかれ、通路の椅子、テーブルにも、まだビニールや、リネンのカバーがかかったままになっているのが多かった。

「田宮さんは、このホテルの事、前から知つとられたとですか？」

ドアのあいたエレベーターにのりこみながら、早坂はきいた。

「知つとるわけがなからうが……」と田宮は生あくびをかみしめながらいった。「兵庫県知事と、近畿電電局長が、千里の迎賓館のロビーで、立ち話ししてるのを、ちよいと小耳にはさんで、それからすぐしらべたんじゃ……。そしたらまあ——表向きは、名古屋の私鉄が経営の看板になつとるが、出資者は、愛知県がはいつとる、名古屋市がはいつとる、大手都銀や、地もとの銀行ははいつとる、大自動車産業や重工業も一枚かんどるし、ニューメディア関連では、東京の大手私鉄系とも手をむすんどる。郵政、電電、NHKの古手も役員にはいつとる……。地もとのテレビ局に、アメリカの大手コンピューター会

社まで、日本の商社をタミーにつかつてのつかつとるがね……。一年以上前から、このすぐ裏手の古いビルの三階から六階までかりきつて、客室の内装ができる前に、大型コンピュータやら、光ファイバー、宇宙通信設備、双方向テレビなど、機械や設備類はほとんどすすんで、この秋口から、テストをはじめとつたとよ……」

「ふええ……」と早坂は不精鬚をなでながら奇声を発した。「愛知県も、中京財界も、そらまた、えらくがんばつたとですね……。それでも、地もとの人さえ、あまり知らんようやし……。なんかえらく地味にやつとつとですね」

「わしは、どうも、このしかけの裏には、誰かどえらい策士がおるとふんどるんじゃが……」田宮は上昇しつつあるエレベーターの天井をにらみつけるようにしながらつぶやくようにいった。「名古屋は、例のオリンピック誘致でしくじってから、次に何かを、と考へとる向きも多いばいね。アイデアはいろいろとあろうが——とにかくこれだけのしかけを、

いわば隠密裡につくり上げてしもうたとなると……まあ、名古屋、愛知ちう所は、実力のある企業はいろいろあるし、名古屋人はすごい働きもンやし……これで、政治性と、ものすごい知恵者がおりや、相当な事をやるばい……。何せ、かつては、御三家の尾張宗春公御城下やもンね……」

「戦国期には、近くから信長、秀吉、家康と大ものが出とりますもンね……」早坂もわかつたようになずいた。「ほいで、このホテルは——いわゆるニューメディア時代のセンターねらいでしようか？」

「“ホリデイ・イン”ちゅう、アメリカの、でかいホテル・チェーンを知つとろうが……。まあビジネス・ホテルのどかいやつみたいで、あまり豪華なものやない、値段も大衆的やが……」田宮はまだうす汚れたウレタンフォームのシートにおおわれた内壁によりかかつていった。「それがこのごろアメリカでは、衛星通信をつかつた、テレコンファレンスができるつちう事を売りものにして、宣伝しとるそ

うや……」

「はあ、なるほど……」早坂はたよりない調子で相槌をうった。「テレコンファレンスちうと——テレビ会議みたいなもんですか？」

「まあ、そうやるな。そこらへんは、おいもよう知らんたい……」田宮は苦笑した。「『ホリデイ・イン』ちうのは、今までアメリカにごまんがある国内空港のちかくにチェーンをもっとつてな。——国内線の中つぎで一泊するのに便利やったんやが……アメリカでは何しろ、年間五十兆円も、会議用のビジネス・フライトがつかわれとるたい。なにしろ、あの国は、大陸やもンね。——それが通信衛星や光ファイバーつこうた、テレビ会議とやらにきりかわりそうなんで、先取りせんならんとかんばつとるんやろ……」

「すると、このホテルも、そのなんとかインと同じねらいですか？」

「いや——どうも、役員構成やら何やらみると、どうも国内だけでなく、国際会議を……」

その時、エレベーターがとまり、ドアがあいた。

——田宮は話を途中でやめて、十階の通路へ出た。

まだ正式営業はしていないので、通路はしんとしずまりかえり、エレベーター・ホールの一隅には、カーベットがぐるぐる巻きにしておかれている。しかし、ホールから左側のウイングは、もう床からカンバスもとのぞかれ、ガードマンの制服を着た男が、二人を見て、視線を強めた。——早坂の方は、前に顔をおぼえているらしかったが、田宮の方へ、たずねるような眼つきをなげかけたので、彼は服のポケットから「PRESS」と書かれた腕章を出してひらつかせた。

ガードマンが軽く挙手するのを、横眼に見ながら、早坂と田宮は通路を右に曲った。——ずっとむこうまで、両側に客室のドアがならんでいるが、二人が曲った時、正面つきあたりのドアがあいて、がっちり肩幅のひろい男のシルエットが、室内の明りを背景にうかび上った。

男はそのまま廊下をこちらへ近づいてくる。二人

はこちらから奥へ歩きつづけ、両者の距離はたちまち接近し、ほの暗い通路の明りでも、双方の顔が見わけられるぐらいになった時、「お！」と田宮は先方の顔を見て、声をあげた。「何とまあ！——成瀬さんやないですか！」

相手は、たちどまって、鋭い射るような視線を、すばやく田宮と早坂の二人にはせた。

「ええ、成瀬ですが……」と、その五十六、七と見える男は、しわがれた声でいった。「失礼ですが、どなただったかな？」

「田宮ですよ、ほら……」田宮は明りの中に顔をつき出すようにして笑いかけた。「六九年のあのさわぎの時、桜田門の保安部で、A新聞の松ちゃんなんかと、よくあんたのレクチャーきいては、議論したでしょうが……七〇年万博の時は、あんたしょつ中大阪へきて——ほれ、新世界のジャンジャン横丁へ二度三度飲みに行つて……」

「ああ！——何だ、宮さんか……たしかA新聞の……」

相手もやつと田宮を見わけたらしく、眼を大きく見ひらいた。

「いまはもう、そちらはやめて、九州国もとのちっこい地方紙で、くすぶつとりますたい……」田宮は頭をがりがりかいた。「あんたは、あのあたしか——公安調査庁へ出向して……調査第一部やったかな？」

「私ももうそこはやめて、今は植木先生の関係しておられる会社にいる……」成瀬というもと警察官は、再び射すくめるような鋭い眼を、早坂の方へむけ、一瞬のうちに上から下まで、視線を走らせながらいった。「あんたはまた何でここへ？」

「何でつて……もうロートルやけど、まだ新聞記者ですぜ。——この非常事態下の、全国知事会議を、取材にきてるにきまってますがな……」田宮は早坂に先へ行けと合図しながらいった。「それで、成瀬さん、あんたは？——もと公安委員のボディガード？」

「こつちに、近畿と九州と北海道の公安調査局の、